

東大を去るにあたって

尾本 恵 市 (人類学専攻)



私が駒場の理科2類に入学したのは昭和27年である。以来、留学や客員研究員での海外生活が延べ5年ほどあるが、あとはずっと東大にいた。つまり37年ほど東大にお世話になったことになる。実は、あまり自慢にはならないが、駒場を出てから理学部に来るまでには、紆余曲折があり、その間には文学部の学生として卒業までしている。なぜそうなったかを話せば長くなるが、要するに私はモラトリアム人間であったということらしい。もともと、小さいときから私は昆虫少年で、休みの日には必ずといってよほど捕虫網をもって山野を駆け回っていた。いずれ昆虫学者にでもなるかと思いつつ漠然とした気持ちで理2に入った。駒場でも昆虫(蝶)への思いは一向にさめることなく、春や夏の休みには信州や北海道へ採集旅行をし、また暇さえあれば上野の科学博物館に出入りしては標本の整理を手伝ったりしていた。多少勉強に役だったことといえば、外国のコレクターとの文通を通じて語学力を身につけたことくらいであった。

またたく間に進学の時がきたが、自分が何をやったらよいのかわからなかった。当時、昆虫の関係でやはり出入りしていたのが医科研の寄生虫部だったので、医学部でも受けてみるかという気

持ちになった(当時は理3はまだなく、医学部を受験するのは主に理2の学生だった)。試験問題を見て驚いたのは、第1問が「シラミの図をかけ」というものだった。もっとも、これは得意の分野であったのでよくできた(と思う)。ところがあとがいけない。どの問題も難しく、いい加減な気持ちで受験したわが身を呪ったがあとの祭である。そんなわけで見事に受験に失敗し、さてどうするかというときになって考えたことは、いますぐに志望するところは見あたらないが、将来いずれにしても役に立つであろう語学をとりあえずやっておこうということであった。いつかは行きたいと思っていたのがドイツであったので、独文を選んだのである。そんなわけで、独文学科の先生方には申し訳なかったが、ドイツ文学のほうはそこそこに勉強して、相変わず蝶の研究めいたことを続けていた。もっとも、R. シンチンゲル先生(故人)の講義は大好きで、先生が名調子で朗読されるシラーやヘルダーリンの詩をうっとり聞きほれていたことを思い出す。当時、私はピアノにも凝っていて(とはいってもとても人様に聞かせられるような代物ではなかったが)、レパートリーはもっぱらバッハ、モーツァルト、ベートーベン、ブラームスであったから、相当なドイツかぶれであったには違いない。

そんなある時、理学部の鈴木尚教授(現名誉教授)が文学部の学生向きに人類学の講義をなさるといので受講した。うかつにして、それまで人類学についての知識はなかったのだが、この講義に私は夢中になった。先生は骨の形態がご専門で、卓上に様々な人骨を並べて、人類の進化や多様性についてわかりやすく講義された。私は、毎回のよう質問をしたので、あとでうかがったと

ころでは、先生は文学部にも変わった学生がいるものだなと感じられたそうである。もともと私の蝶への興味も、生物のもつ多様性とそれをもたらす進化の不思議さから出発していた。人類学は、まさにその進化と多様性の研究をヒトというわれわれ自身について行うものである。私は、長年探し求めてきたものとうとう出会ったと感じた。そこで、鈴木先生にお願いして、理学部に学士入学させていただくことになり、昭和32年に生物学科人類学課程でのスタートとなった。

人類学の講義はすべて興味深いもので、私はそれまでの怠惰な生活を清算すべく、懸命に勉強した。当時一講座であった人類学教室は、教官と学生を合わせても20名にたらず、家庭的な雰囲気につつまれていたが、個性豊かな人が多く、談論風発で絶えず学問論に花を咲かせていた。当時まだ助手であった渡辺直経先生（現名誉教授）にはずいぶんと飲みにつれていただいていたが、酒場でも話題は人類学はどうあるべきかであり、口癖は、皆が人類学の将来への様々な方向のレールを引くつもりで研究すべきであるということであった。このほかにも、毎年夏休みには発掘旅行があり、学生は野外実習として参加できたが、夜などは先生方と語り合えるのが楽しみだった。このように、授業以外にずいぶんと教えられるところが多かったのはよき時代の思い出である。

私は、当時何となく遺伝学の重要性に気付いていたので、修士課程では皮膚色における遺伝と環境に関する研究を行った。ところが、いまでは考えられないことだが、当時の人類学では遺伝などというものは研究に値しないという考えがあり、私は大御所の長谷部言人先生（故人）に叱られてしまった。人類学は、人体が環境によりいかに変化するかを研究するもので、変化しない遺伝という現象とはあい容れないというのが先生の主張であった。私は生意気にもいろいろと反論したように記憶しているが、進化ないし多様性の研究には遺伝学の立場からの接近が必要であるとの考えは変わらなかった。博士課程に進んでから念願のド

イツ留学もかない、私はヒトの遺伝的個人差の研究を主なテーマとするようになった。現在の人類学教室では、遺伝学関係の研究室が3つもあり、DNAから染色体、さらに集団遺伝学の研究が盛んに行われている。まことに今昔の感が深い。

人類学ではフィールド調査、実験室での研究それに理論的接近法があたかも3本の柱のように重要である。私の場合、フィールド調査で血液を集め、実験室でアイソザイムなどの蛋白の遺伝的多型を検査し、それにより得られる遺伝子頻度のデータを多変量解析法により、集団間で比較して人種的系統関係を探るといような仕事を続けてきた。フィールドとしては、北海道、沖縄、オーストラリア、フィリッピン、中国の海南島および東北部、モンゴルなど、昭和39年に助手になってから丁度30年の間に、ほとんど隔年のように出ていたように思う。やはり、以前蝶を求めて山歩きをしたせいか、フィールド調査は私にとって実に楽しい数々の思い出を残してくれた。ストレス解消や、頭のウォーミングアップなどにも役だったように思う。実は、つい昔の癖で、旅行鞆の中に捕虫網をそっと忍ばせて家内に見つかってからかわれたりしたものだ。しかし、幸か不幸か、だいたい血液を集めに行くのは、虫のあまりいない冬だとか乾期を選んで旅行するので、蝶の方はほとんどとれなかった。

蝶といえは、10年ほど前、医学部本館の前の緑の一角にウマノスズクサという蔓草が沢山生えているのに気がつき、それがジャコウアゲハという黒いアゲハの仲間の幼虫の食草なので、ひょっとしたら飛んでくるかと楽しみにしていた。ところが、ある時、5月だったと思うが、あっと驚かされることが起きた。何とそのあたり一面にホソオチョウという白いアゲハの仲間が群れ飛んでいるではないか。ホソオチョウは中国や朝鮮の蝶で、日本には本来いないはずの蝶であるが、やはりウマノスズクサを幼虫の食草とする。誰かが密かに朝鮮あたりで取った雌を持ち込んで放したのであろう。それ以来5年あまりにわたって、春、夏、

秋と年に3回この場所でホソオチョウが見られるようになり、学内広報の表紙にもなり知る人ぞ知る目の保養であった。しかし、職員が手入れのために下草を刈り取ってしまったので、蛹も一緒に除去されてしまったことが主な原因と思われるが、とうとう絶滅してしまったことは残念である。もっとも、そのあと、また誰かが放したと見えて、ジョコウアゲハの姿が数年にわたり見られたが、それもまた見られなくなった。

まったく早いもので、私も定年退官を迎えることになった。思えばいろいろなことがあった。大学紛争はその中でも最大の出来事であった。しかし、大学自体はこの30年間あまり変わっていないように思う。よく学生は変わったといわれるが、私は自分が型破りの学生であったせいとか、あまりそのようには思わない。いつの世でも、いろいろな学生がいるのであろう。ただ、人類学教室だけ

に限っていえば、近ごろの学生はおとなしく、あまり酒など飲んで先生に絡むなどといったことはせず、われわれの学生の頃とは違っているようである。なにか、教官との間に一線を画しているようにも思える。教官の方も、主として経済的理由であまり学生を引き連れて飲み歩くなどということとはできなくなった。また、野外実習の発掘旅行も少なくなった。その点で、よき時代の人類学教室の伝統である課外授業の機会が少なくなってしまったのは残念である。

いつの頃からか、私は自分であいうえおの処世訓なるものをつくり、いましめとしてきた。それは、「焦るな」、「威張るな」、「うそを付くな」、「遠慮するな」、「怒るな」というものである。少しでも参考になれば望外の幸せと思い、ここに若い皆さんに残す言葉としたい。

長い間お世話になりました。

